

高校生参画のまちづくりに関する一考察  
—栃木市「若者の居場所づくり事業」を事例に—

陣 内 雄 次  
大 嶋 悠 也  
上 田 由美子

宇都宮大学教育学部研究紀要

第66号 第1部 別刷

平成28年（2016）3月

A Study on High School Student's Participation in Machidukuri  
(Community Design)  
–A Case Study of the Place for Youth Project by Tochigi City–

JINNOUCHI Yuji, OSHIMA Yuya, UEDA Yumiko

# 高校生参画のまちづくりに関する一考察 — 栃木市「若者の居場所づくり事業」を事例に —

A Study on High School Student's Participation in Machidukuri  
(Community Design)  
— A Case Study of the Place for Youth Project by Tochigi City —

陣内 雄次<sup>†</sup>, 大嶋 悠也<sup>‡</sup>, 上田 由美子<sup>‡</sup>  
JINNOUCHI Yuji, OSHIMA Yuya, UEDA Yumiko

## 概要 (Summary)

本研究では、高校生の「まち」への意識(まちづくりへの参画意欲)、自他に対する意識の変化(自己形成)を誘発する大人の働きかけとプログラムについて、栃木市「若者の居場所づくり事業」を事例に検証した。参与観察、フィードバックシート、アンケートを用いてデータ収集・分析した結果、地元への強い関心と愛着を持つ大人との関わり、自己成長を実感できるプログラム構築、まちあるきの重要性などが明らかになった。

キーワード：高校生 (High School Student), まちづくり (Community Design), 若者の居場所 (Place for Youth)

## 1. はじめに

### (1) 本研究の目的

本研究の目的は、高校生の「まち」への意識(まちづくりへの参画意欲)、自他に対する意識の変化(自己形成)を誘発する大人の働きかけとプログラムについて検証することにある。つまり、地方における高校生のまちづくり参画の必要性和高校生の自己形成の獲得の重要性を、まちづくりとそれへの参画という切り口から明らかにしたいと考えたのである。

このため、栃木市による「若者の居場所づくり事業」(2013年度)を対象に、調査研究に取り組んだ。本事業の主要なアクターは栃木市内の高校に在籍する高校生16名である。本事業に参画した高校生の「まち」への意識、自他に対する意識の変化を誘発する大人の働きかけとプログラムについて、参与観察、フィードバックシート、アンケートを用いてデータを収集し、分析を行なった。

### (2) 既存研究の整理

「居場所」とは、もともと「いどころ」「座る場所」など、物理的な意味で使用されていた言葉であるが、1980年代以降、小・中学校における不登校児の増加が社会問題化するにつれ、その対応策として「心の居場所」などという言葉が使用されるようになり、徐々に心理的側面を含んだ概

<sup>†</sup> 宇都宮大学 教育学部 (連絡先: jinnouhi@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

<sup>‡</sup> 株式会社ネオキャリア

<sup>‡</sup> 認定NPO法人宇都宮まちづくり市民工房

念へと変化していったと言われている [1]。

本研究に関する既存研究としては、子どもの居場所に関する研究、居場所と参画に関する研究など多様である。例えば、子どもの「居場所」に関する研究である住田正樹・南博人の『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』（2003年）では、大人と子ども、または子ども同士といった対人関係に焦点をあて、家庭、学校、地域における「居場所」について研究している。また、田中治彦は『子ども・若者の居場所の構想－「教育」から「関わりの場」へ－』（2001年）で、子どもや若者の生活空間と「居場所」との関係について述べ、子ども・若者を取り巻く生活や社会環境が大きく変化したことによって、「居場所」の意義やあり方に影響が及んでいることを明らかにしている。居場所における子どもの参画やそれを支える大人の存在に着目した研究としては、山下智也の「地域に開かれた日常的な場面での子ども参画の実現－子どもが主体的になっていく様相と大人の存在に焦点を当てて－」（2006年）があり、大人の存在が子どもの参画を誘発することを指摘している。鳥居一頼は、「まちづくりネットワークとしての高校生の市民的存在について－秋田県大館高校生まちづくり会議HACHIの実践に学ぶ－」（2014年）の中で、高校生がどのように地域社会の人たちや暮らしの問題に気付き、どのように社会力を身につけて成長していくのかについて考察している。

以上、関連する既存研究を整理した。その結果、高校生の自己形成とまちづくりへの参画との関係に着目した研究を見いだすことは出来なかった。本研究は、これまで述べてきたように、これからのまちづくりにおいて役割が期待される高校生を対象に、若者のまちづくり参画事業をケーススタディし、高校生の自己形成と高校生のまちづくり参画との関係性に注目し、大人の関わり方、プログラムのあり方を実践的に検証するものであり、そこに本研究の独自性と意義を見いだせる。

## 2. 若者の居場所づくり事業からの検証 —プログラムと大人の働きかけに着目して—

本節では、栃木市における「若者の居場所づくり事業」を通して、高校生のまちづくり参画の促進や、まちへの関心を引き出すのに有効な大人の働きかけ及びプログラムについて検討する。

### (1) 栃木市「若者の居場所づくり事業」について

#### 【目的】

本事業は、人と人との関係づくりや地域の生活上のルールを守るといった経験や交流を通して、社会性に富んだ青少年を育成することを目的とする。

#### 【事業概要】

本事業は、趣味や特技を生かした活動、ボランティアやまちづくりに関心のある青少年が気軽に集い、同世代の仲間だけでなく大人とも語り合いながら、自主的な活動を展開していくための青少年の居場所づくりを支援していく事業であり、青少年の健全育成・非行防止活動の推進及び、自分の生まれ育った地域を知るというふるさと学習も含めた青少年教育の推進を図る施策として位置付けられている。居場所の利用者（エンドユーザー）となる青少年自身が、その居場所のあり方や施設の内容について意見を交わし、大人の協力を得ながら、居場所の整備方針についての提案をまとめ市に提出する手法を取り入れるものである。検討の過程を通じて、青少年自身が栃木市のまちづくりに参画する意識と地域への愛着を持つことで、将来の栃木市のまちづくりを担う人材の発掘と育成を図るとともに、地域の大人と青少年がつながりを持つことにより、地域での学びの向上が図られることが期待された。

## 【実施体制】

栃木市内の高等学校に通学する者16名／栃木県内の大学又は専門学校に通学する者8名／公募による者（ファシリテーター）1名／その他教育委員会が必要と認める者7名／宇都宮大学教育学部教員1名／同研究室生3名／アドバイザー1名／栃木市教育委員会事務局2名

## (2) 参与観察

### 1) 参与観察の概要

#### 調査目的

検討会のプログラムや大人の働きかけと高校生の検討会への参画状況などから、高校生の地域参画促進・まちへの関心度向上に有効なプログラムと大人の働きかけを整理し、今後の高校生参画のまちづくりの在り方を検討するため参与観察を行った。なお、ここでは推進体制もプログラムとして捉えている。

#### 調査対象

栃木市内8校の代表16名（各校2名ずつ）／大学生8名／公募委員1名／アドバイザー1名／行政職員1名／宇都宮大学教育学部教員1名／同研究室生3名

#### 調査方法

- ・参与観察

#### 調査時期

2013年7月上旬～2014年3月中旬（検討会16回＋中間報告会・最終報告会＝18回）表－1

#### 参与観察データの妥当性について

観察者独自の推測がかなり入り込むような観察の場合に、誤りが起きやすい。例えば、直接に観察ができない現象や、観察者の理解を超える専門的な知識が必要とされる現象の観察には、思い違いが起りやすい。そのため、妥当性を高める方法として、以下の2つの作業を実施した。①観察者の判断の基準を明確にする。②当事者ないし第三者に観察者の観察記録の妥当性について判断を仰ぐ。

観察手続きからくる記録ミス、記録の偏り、観察者の記憶違い、観察者の先入観や傾向が生じる可能性があるため、妥当性を高める方法として、以下の3点に注意して参与観察を実施した。

- ・観察記録を観察の直後につけるようにして、忘却や記憶違いを減らす。
- ・オーディオ、ビデオ機器で記録を補助する。
- ・複数のメンバーからなる観察チームを作り、お互いの観察記録を随時つきあわせてチェックしながら研究を進める。

表-1 栃木市「若者の居場所づくり事業」検討会の流れ

内容	日時	
計画策定	2013/7/28	(関係者顔合わせ)
趣旨説明・アイスブレイク	2013/8/3	(第1回検討会)
居場所について 居場所って何？	2013/8/26	(第2回検討会)
	2013/9/12	(第3回検討会)
	2013/9/26	(第4回検討会)
	2013/10/28	(第5回検討会)
居場所をデザインする		
中間報告会に向けての準備	2013/11/14	(第6回検討会)
中間報告会	2013/11/18	(中間報告会)
中間報告会を終えて	2013/12/11	(第7回検討会)
求める居場所とは まちあるき・アンケート	2014/1/13	(第8回検討会)
	具体的なアイデア出し	
	2014/1/30	(第9回検討会)
	2014/2/11	(第10回検討会)
	2014/2/28	(第11回検討会)
	2014/3/4	(第12回検討会)
発表会の準備	2014/3/11	(第13回検討会)
	2014/3/18	(第14回検討会)
自主的なあつまり	2014/3/19	(自主的検討会)
	2014/3/20	(自主的検討会)
最終報告会	2014/3/21	(最終報告会)

## 2) 参与観察の調査結果

参与観察から得られた、高校生の地域参画・まちへの関心促進に有効な大人の働きかけは表-2に示した通りである。なお、表中の①②③という表記は大人の働きかけの時期を示し、①序盤、②中盤、③終盤の3パターンで分類した。序盤・中盤・終盤については以下の様に定義した。

- ①序盤：関係性構築の段階から、本格的な活動に移行するまで  
(第1回検討会から中間報告会まで)
- ②中盤：本格的な活動に移行してから、最終的な成果物を製作する段階まで  
(中間報告会から第14回検討会まで)
- ③終盤：最終的な成果物を製作する段階から、検討会活動が終わるまで  
(第15回検討会から最終報告会まで)

表－２ 参与観察からわかった高校生の地域参画・まちへの関心促進に有効な大人の働きかけ

	地域参画促進に有効な働きかけ	まちへの関心促進に有効な働きかけ
A.高校生に作業を与える	①宿題を与えることで、宿題提出時の検討会で積極的な発言が観察できた。	①宿題のテーマをまちに関わるものにするすることで、まちへの関心を引き出せる可能性がある
B.高校生に役割を与える	②・③公の報告会にむけた役割分担をすることで、役割に応じた高校生の参画を促すことが出来た。	
C.高校生に情報を与える		①高校生の出身地で行われている高校生事業についての紹介が、地元への関心につながった。
D.高校生の参加しやすい環境をつくる	①会場に関して、高校生にとっての機能性と利便性を重視することで参加可能時間が増加した。	
E.高校生に企画運営させる	②高校生の自主性を尊重し、運営を任せると、自主的にアンケート調査やまちあるきを実施した。	
F.市長と自治体長の意見交換	②市長からのメッセージは高校生の意識や行動を変えるだけの圧倒的なパワーを持っていた。	



写真－１ 検討会の様子（2013年9月26日）

次に、参与観察より、プログラムによって高校生の地域参画・まちへの関心促進につながったと考えられることは以下の通りである（表-3）。プログラムを導入する時期については、前表と同様に①序盤、②中盤、③終盤の3パターンで分類した。

表-3 参与観察からわかった高校生の地域参画・まちへの関心促進に有効なプログラム

	地域参画促進に有効なプログラム	まちへの関心促進に有効なプログラム
アイスブレイク	①高校生同士の交流が参画促進に関係するため、アイスブレイクで高校生の活発な交流を図ることが大切。	
講義形式 情報提供		①情報の質によって、高校生のまちへの関心を引き出せることがわかった。高校生が自分事として捉えやすい情報を与えることが必要。
対談形式 情報提供		
付箋活用 グループワーク	①②検討会活動での自分の語彙力の足りなさや、要約力の足りなさを不満に感じ、それを改善することを参画の動機にしている高校生もみられた。	①“居場所”というテーマで検討会活動をしたことで、自然とまちについて考えるきっかけが出来ていた。
発表	①②付箋を使ったグループワーク同様に、意見を述べたり、意見をまとめたりする学びの機会として検討会活動を捉えて参画している高校生が見られた。	
振り返り	①②③高校生が振り返りや感想を共有していく中で、自己成長を実感出来れば、それが事業参画への1つの動機付けになると考えられる。	
まちあるき	②まちあるき以降の検討会では、高校生の意見の活発さが増し、積極的に行動するようになった。	②まちあるきを通して、「通学路がいつもと違って見える」などといった声が聞かれたことから、まちへの関心が高まったと考えられる。
感想共有	①②③振り返りの項目でも述べたが、高校生が振り返りや感想を共有していく中で、自己成長を実感出来れば、それが事業参画への1つの動機付けになると考えられる。	

### (3) フィードバックシートとアンケート

フィードバックシートとアンケートでは、大人の属性にも注目して高校生の地域参画・まちへの関心促進につながったと考えられることを整理した。フィードバックシートとアンケートからわかった高校生の地域参画・まちへの関心促進に有効な大人の働きかけについては、表-4の通りである。大人の働きかけの時期については、前表と同様に①序盤、②中盤、③終盤の3パターンで分類した。



表-4 フィードバックシートとアンケートからわかった  
 高校生の地域参画・まちへの関心促進に有効な大人の働きかけ

	地域参画促進に有効な働きかけ	まちへの関心促進に有効な働きかけ
公募委員 29歳・男性	①②高校生と個別でLINEを使ったコミュニケーション。	
お笑い芸人 32歳・男性	①笑いによって場を和ませる。 ①②③お笑い芸人という存在が、高校生の会話のネタになって、コミュニケーションを促進させている。	
教授 59歳・男性	①②「冗談」によって、高校生との距離を縮めようとしたことが関係性構築につながったと考えられる。	
行政職員2名 43歳・男性 44歳・男性	①②③マメな日程連絡が高校生の参画を促していたと考えられる。	
研究室生A 23歳・男性	①大学生という比較的年齢の近い関係性が親近感を創出させていた可能性がある。	
研究室生B 21歳・女性	①                    "	
研究室生C 22歳・女性	①                    "	
まちあるきのコーディネーター 27歳・男性		②地元の若者として高校生に接することで、まちへ関わるキッカケになっている。
市長 63歳・男性	②③市長の高校生への言葉がけによって、高校生の熱意が増す。	③高校生の提案書に対しての迅速な取り組み

### 3. まとめ

本研究では、これまでの先行研究の知見を踏まえつつ、高校生の生活環境である「まち」と関わりをもつ参画プロジェクト「若者の居場所づくり事業」を実践例として取り上げ、そこで活用されるプログラムや大人の働きかけについて検証していくことで、高校生の「まち」への関心や、継続的な「まち」での活動促進につながる示唆を得ることが出来ると考え、事業に参画している高校生の「まち」への意識、自他に対する意識の変化について参与観察とフィードバックシート・アンケートを用いて調査を行った。これらの調査から得られた、高校生の地域参画促進やまちへの関心促進に有効な大人の働きかけ・プログラムについて表-5に示した。①～③については効果的な時期を表している。(①序盤、②中盤、③終盤)

以下、分析・考察を整理する。

#### (1) 大人の働きかけについて

##### 1) 高校生を大人として扱う

大人の働きかけが、高校生の事業参画促進にどのように関係しているのかについては、まず、基本的に高校生を大人として扱うことが、最も重要な大人としての心構えである。高校生だからといって妥協せずに、信頼することが高校生の自信ややる気につながり、それが事業参画促進につながる。高校生の意見にただ同調したり、褒めたりするばかりでなく、ときには厳しく指摘すること

も重要である。それは中間発表での市長の辛口な意見を高校生がしっかりと受け止め、それ以降の検討会で主体的な活動をするようになったことからみとれる。つまり、高校生の一生懸命さに大人が真摯に向き合い、辛口な意見を述べることで、多くの高校生がその悔しさをバネに、参画しようという心がけになったのである。しかし、ここで注意しなければならないのが、やる気を出した高校生に感化されて、大人があれやこれやと手出しをしないことである。高校生の考えたアイデアが未熟なものであっても、予定より大幅に遅れていたとしても、時には見守るくらいの懐の深さを持たなければならない。失敗してから、教えてあげる。それくらいの器量をもって高校生と向き合っていくことが、高校生の主体的な活動の促進につながるのである。

表-5 高校生の地域参画促進に有効な大人の働きかけ・プログラムおよび、まちへの関心促進に有効な大人の働きかけ・プログラムについての整理

	大人の働きかけ	プログラム
地域参画促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>①褒める・笑わせる</li> <li>①・②個別のコミュニケーション</li> <li>②・③高校生に役割を与える</li> <li>②・③高校生の自主性に期待して我慢するという働きかけ</li> <li>②市長からの直接的な言葉かけ</li> <li>②高校生のアイデアへの批判的な意見を含めた大人の意見</li> <li>③提案後の提案内容への迅速な取り組み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①地元芸人や大学生を推進体制の中に組み込んでプログラムを検討する</li> <li>①アイスブレイクによって高校生同士の関係性を構築する</li> <li>①地元の若者による全体ファシリテート</li> <li>①高校生が自己成長を実感するようなグループワークや発表</li> <li>②まちあるき</li> <li>②高校生の主体性を尊重し、運営を任せる</li> <li>②・③高校生に役割を与える</li> </ul>
まちへの関心促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>①・②地元の人とのコミュニケーション</li> <li>③提案後の提案内容への迅速な取り組み</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①宿題としてまちの写真を撮らせる</li> <li>①地元の若者による全体ファシリテート</li> <li>①居場所というテーマについて考えること</li> <li>②まちあるき</li> </ul>

## 2) 高校生と地元で強い関心や愛着をもった大人との接触機会を作る

対象フィールドに対して強い関心や愛着を持っている大人と、高校生とがコミュニケーションをとることにより、高校生がその大人との関わりを通じて対象フィールド（まち）に興味や関心をもつことにつながると考える。そのような中で地元の人を仲介することにより、「まち」を客観的にとらえることができる。そのため、より多くの地元の大人との接点を作ることが重要になってくる。

## 3) 高校生の緊張を解きほぐし、関係性を構築しやすくする雰囲気づくり

大人の働きかけに求められる要素の1つが高校生の緊張感を解きほぐし、関係性を構築しやすくさせることである。そのため、地元で芸人のような大人が存在すれば、その大人と高校生をつなげるような働きかけをしていくことが必要である。

#### 4) 高校生の意見を目に見える形にする

高校生が居場所づくり検討会の中で導き出した提案に対して、目に見える形で迅速に対応していくことが、高校生のまちへの関心を引き出すことにつながっていた。高校生の提案がきちんと市政に反映されているということを高校生に見せることが、高校生のまちへの関心をうむことに繋がると考える。

#### (2) プログラムについて

##### 1) 序盤のプログラムの重要性

高校生の事業参画促進については、事業初期段階におけるプログラムの重要性が明らかになった。事業初期段階は高校生が事業そのものを、自分にとって有益なものかどうかを判断する期間だからである。高校生が事業を有益と感じるポイントは大きく2つに分けられる。

##### ①高校生同士の交流を促すプログラム

一つは、他校の生徒とかかわりを持つことで、自校とは違う新しい友達を作ることができたり、大学生や大人とかかわることで、世代を超えたコミュニケーションができたりするといった他者との関係性によるものである。高校生は新しいコミュニティに居心地の良さを感じると、継続的に事業に参画するようになるため、序盤に徹底したチームビルディングをすることによって、高校生同士の関係性や高校生と大人の関係性を構築していくことで、参画を促進できると考えられる。高校生と大人との心の距離を縮めるためには、地元の芸人のような大人を活用したプログラムを導入することも効果的だと考えられる。同様に、大人と高校生の間に大学生という“接着剤的な存在”がいることも距離を縮めやすくする。

##### ②自己成長を実体験できるプログラム

もう一つは、意見を言えるようになったり、意見を聞けるようになったりといった自己成長にかかわるものである。高校生は検討会活動を自己成長の場として捉えていた。学校活動では学ぶことのできない価値あることを享受できると感じた高校生は、積極的に事業に参画し、自己成長につながろうとしている様子が観察できた。高校生が語彙力や要約力が向上したと実体験出来るようなプログラムを用意することで、事業への参画促進が図れると考える。

##### 2) プログラムのテーマに高校生がまちについて考えやすいものを取り入れる。

プログラムが高校生のまちへの関心をどのくらい引き出せていたのかについて考える。まず、“居場所”というテーマを検討会活動で取り扱ったことが、高校生にまちについて考えるきっかけを与えるとともに、まちへの親近感を感じさせることにつながったのではないかと考えられる。居場所について考える過程で、自分の居場所だと感じる場所を、写真にとってきてもらうという宿題を出した。宿題提出の検討会において、高校生がまちへの強い関心を示していた。こうしたことを考えても、“居場所”について考えることが、次第にまちについて考えることに繋がっていったと考えられる。つまり、高校生参画事業において“居場所”というような、高校生がまちについて親しみを抱きやすいテーマを扱うこと自体が、まちへの関心促進につながると考えられる。

##### 3) まちあるき

まちあるきを導入することも高校生のまちへの関心促進につながった。まちあるき以降の検討会では、意見に具体性が増し、発言量も増加したことを考えると、まちあるきは事業の参画促進に繋がっている可能性がある。つまり、まちあるきというプログラムは、高校生のまちづくり参画にお

いて非常に有効であるということがわかる。

#### 4) 推進体制に地元の若者を組み込んでおく

高校生のまちづくり参画事業の枠組みを検討する最初の段階で、地元の若者を見つけ出し、一緒に事業運営をしていくことが重要である。なぜなら、そのことにより事業の継続性を担保することが出来、高校生の事業参画促進にもまちへの関心促進にもつながるからである。

#### 【参考文献】

- [1] 中島喜代子、廣出円、小長井明美、「「居場所」概念の検討」『三重大学教育学部研究紀要』所収、pp.77-78 (2007)

平成27年9月28日受理